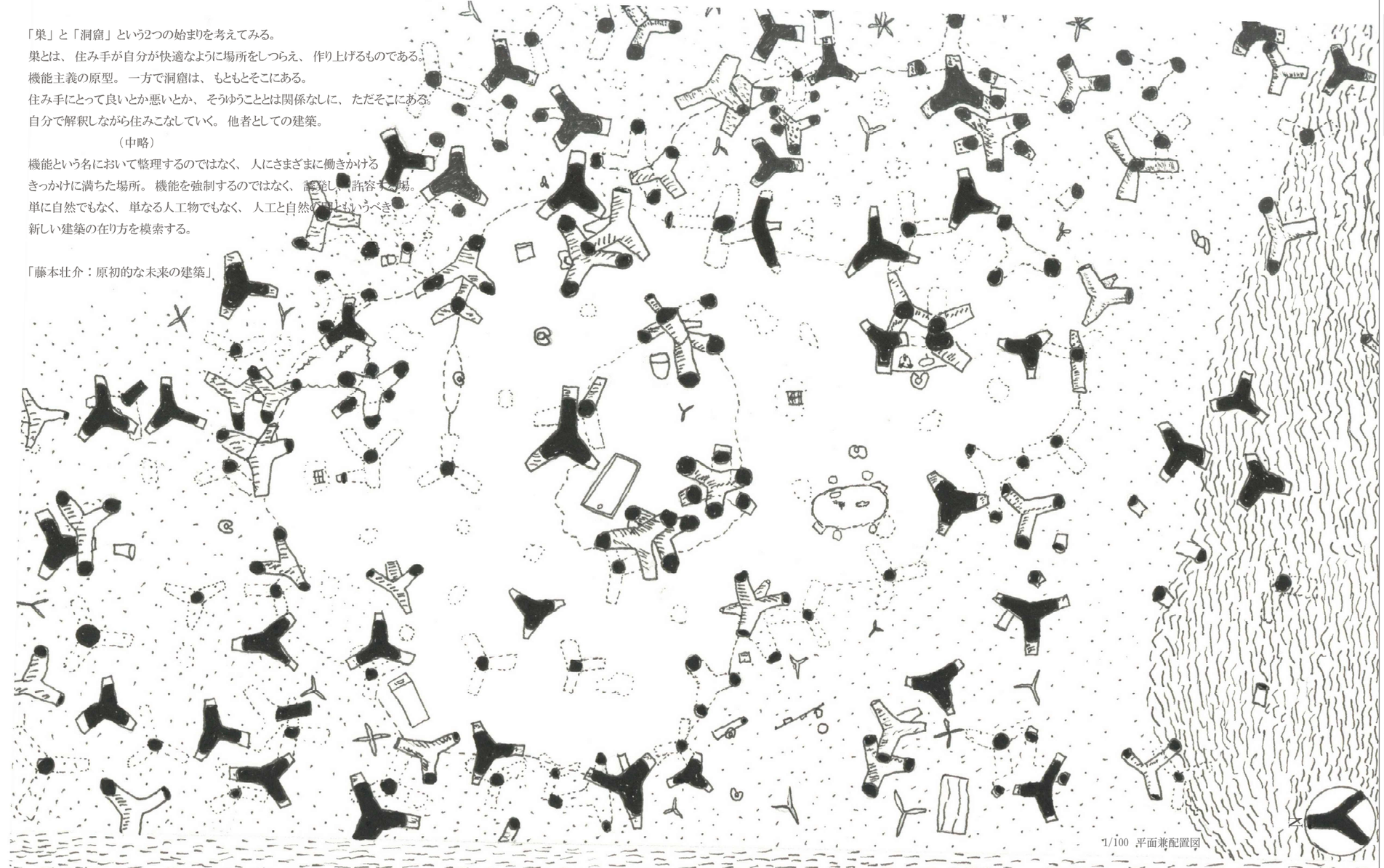
「巣」と「洞窟」という2つの始まりを考えてみる。
巣とは、 住み手が自分が快適なように場所をしつらえ、 作り上げるものである。
機能主義の原型。 一方で洞窟は、 もともとそこにある。
住み手にとって良いとか悪いとか、 そうゆうこととは関係なしに、 ただそこにある。
自分で解釈しながら住みこなしていく。 他者としての建築。

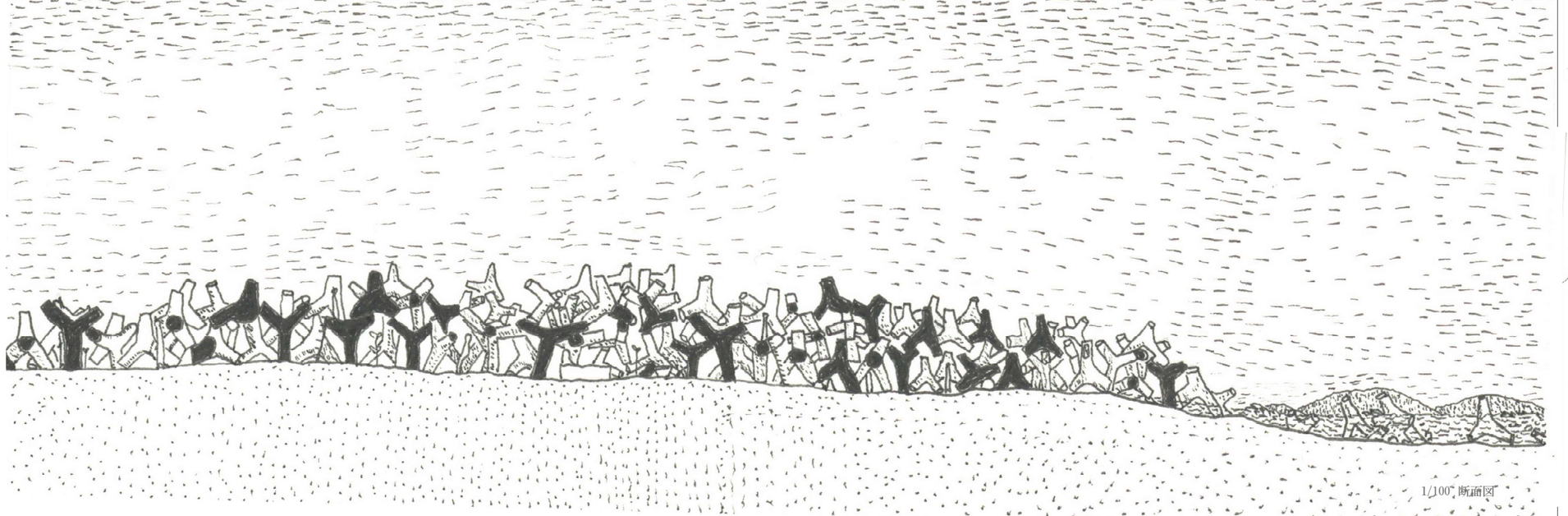
（中略）

機能という名において整理するのではなく、 人にさまざまに働きかける
きっかけに満ちた場所。 機能を強制するのではなく、 誘発し、 許容する場。
単に自然でもなく、 単なる人工物でもなく、 人工と自然の間ともいうべき
新しい建築の在り方を模索する。

「藤本壮介：原初的な未来の建築」



1/100 平面兼配置図



1/100 断面図

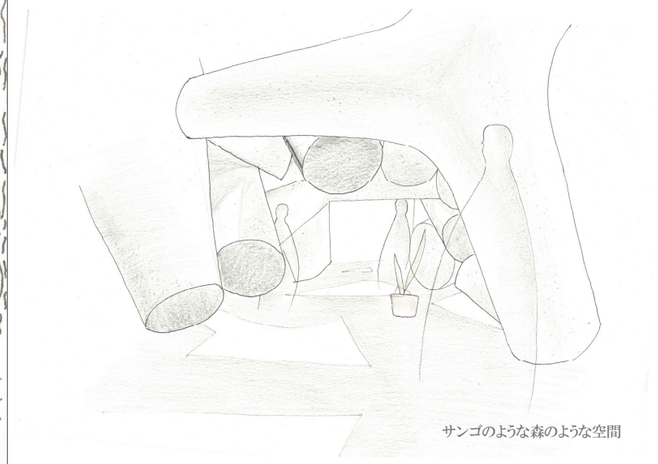
Primitive Future House

藤本壮介の final wooden house を集中表現する

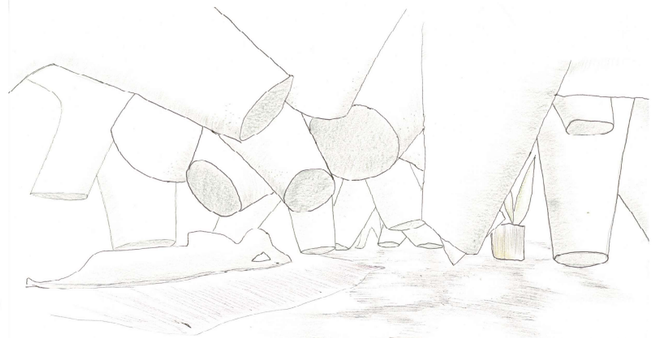
原始的な建築の成り立ちを考えるために、私は藤本壮介の「final wooden house」を集中表現しようと考えた。この建築では藤本壮介の概念を受継ぎ、一つの素材で究極の建築を表現することにした。そこで、海に打ち捨てられている。消波ブロックを用いて建築を考える。消波ブロックはその特異な形から扱いが難しく、海岸沿いに敷き詰められている。それは単体で見ると完全にモノである。しかし、ブロックを積み上げることでモノと建築のあいだともいえるべき空間を生み出している。どこまでも曖昧でぼんやりとした、空間を内包する場となる。この住宅はもはや住宅建築という範疇に納まらない、ブロックが空間をつくり、場を作る。建築以前とも言っていい原初的な存在である。それは新しい建築というよりも新しい成り立ち、新しい存在である。

熊本アートポリスで出展された
「final wooden house」

小さなものが寄せ集まって出来る群



サンゴのような森のような空間



人工物と自然物のあいだ